



第7回日本視野学会学術集会 モーニングセミナー4

進化し続ける静的・動的視野計 — 視野計のupdate —

座長

大久保 真司 先生

おおくぼ眼科クリニック
金沢大学眼科



講演 1

静的視野: RGC displacementを考慮したOCT対応視野計

宇田川 さち子 先生

金沢大学眼科



講演 2

動的視野: 自動視野計による動的視野検査

松本 長太 先生

近畿大学眼科



視野の古典的定義は、「片眼で一点を見つめたときに見える範囲」とされている。しかし、視野計が進歩し疾患への理解が進み、さらに視野計が進歩するという歴史が繰り返され、視野の範囲だけでなく、その内部の感度分布も評価が可能になり、現在では視野の定義として「視覚の感度分布」という表現が用いられている。

1945年にGoldmannにより、Goldmann視野計が開発され動的視野計が標準的な視野計として普及した。その後、コンピュータの進歩に伴い視野の自動化が研究・開発され、静的自動視野計が確立した。統計解析ソフトの進歩に伴い、自動視野計は広く普及し、現在に至っている。一方、動的視野計は、検査者の技量に大きく影響されることもあって、その普及率は低下の傾向にある。

しかし、動的視野計の進歩未だ止まらず、検査者の技量に影響されない自動動的視野検査の時代に向かっていく。静的視野計に関しては、検査点や測定アルゴリズムが固定されたことにより、進行判定も精密に行うことが可能になっている。しかし、極早期緑内障では6度間隔の検査点配置では異常が検出されないことが指摘されてきている。

静的視野の新たな可能性として、眼底所見やOCT所見に対応した視野計が臨床応用されつつある。静的視野計のオプションのひとつとして、OCT対応視野計の有用性とそこから明らかにされた検査点配置の問題点とその対策について金沢大学の宇田川さち子先生に、動的視野計の歴史から進化し続けている自動動的視野検査について近畿大学の松本長太先生にお話し頂きます。

進化し続ける視野計の情報をアップデートできるセミナーになるものと確信しています。

2018年

5月13日(日)

8:00~9:00

第1会場

石川県立音楽堂 2F
コンサートホール
1階席

共催: 第7回日本視野学会学術集会



興和株式会社